

# 株式会社 構造ソフト

## 今月のイチオシ

2025年9月号

### 拡張情報

「BUILD.一貫VI」(Ver.1.39) …P1

「BUILD.GPIV」(Ver.1.73) …P2

「BUILD.積算II」(Ver.1.20) …P3

### Q&A (適判等からの指摘事例)

「BUILD.一貫VI」Q&amp;A …P4

#### ◆「BUILD.一貫VI」(Ver.1.39)

##### ・株式会社向山工場製の「EMケープ685」に対応

2025年9月にリリースした「BUILD.一貫VI」(Ver.1.39)より、株式会社向山工場製の高強度せん断補強筋「EMケープ685」に対応しました。EMケープ685はRC大梁、基礎梁、RC柱に使用でき、入力画面および計算書では以下の呼び径で表記します。

・EMケープ685 : MA10、MA13、MA16

SABTEC評価を受けており、既に組み込み済みのSABTEC高強度せん断補強筋設計指針による高強度せん断補強筋と同様の計算内容となります。計算の詳細は、『SABTEC高強度せん断補強筋設計施工指針』を参照してください。

高強度せん断補強筋	会社名	設計指針	評価番号
EMケープ685	株式会社向山工場	EMケープ685 設計施工指針 (2024年)	SABTEC評価 24-03

高強度せん断補強筋入力方法、計算ルート3の短期せん断力に対する検討方法の指定方法、終局せん断耐力式の指定方法については「[今月のイチオシ](#)」2024年3月号で紹介していますので併せてご覧ください。

EMケープ685は基礎梁のせん断補強筋にも使用できるため、杭・基礎梁一連計算プログラムである「BUILD.GPIV」でも対応しました。また、「BUILD.一貫VI」の対応に伴い、オプションプログラムである「BUILD.積算II」でも対応しました。

## ◆「BUILD.GPⅣ」(Ver.1.73)

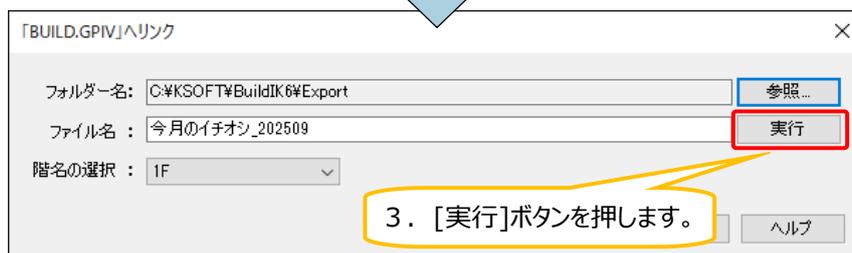
### ・株式会社向山工場製の「エムケーフープ 685」に対応

「BUILD.一貫Ⅵ」に合わせて、2025年9月にリリースした「BUILD.GPⅣ」(Ver.1.73)より、株式会社向山工場製の高強度せん断補強筋「エムケーフープ 685」に対応しました。

### ・「BUILD.GPⅣ」へのデータリンクの方法

「BUILD.一貫Ⅵ」で計算を実行した後、以下の手順に従って「BUILD.GPⅣ」へデータのリンクが行えます。

1. リボンメニューの[ファイル]メニューの[他製品ヘデータリンク]を押します。
2. [「BUILD.GPⅣ」ヘリンク]を押します。
3. [実行]ボタンを押します。
4. 「BUILD.GPⅣ」についての説明は、[「今月のイチオシ」2022年4月号](#)で紹介していますので併せてご覧ください。



## ◆「BUILD.積算Ⅱ」(Ver.1.20)

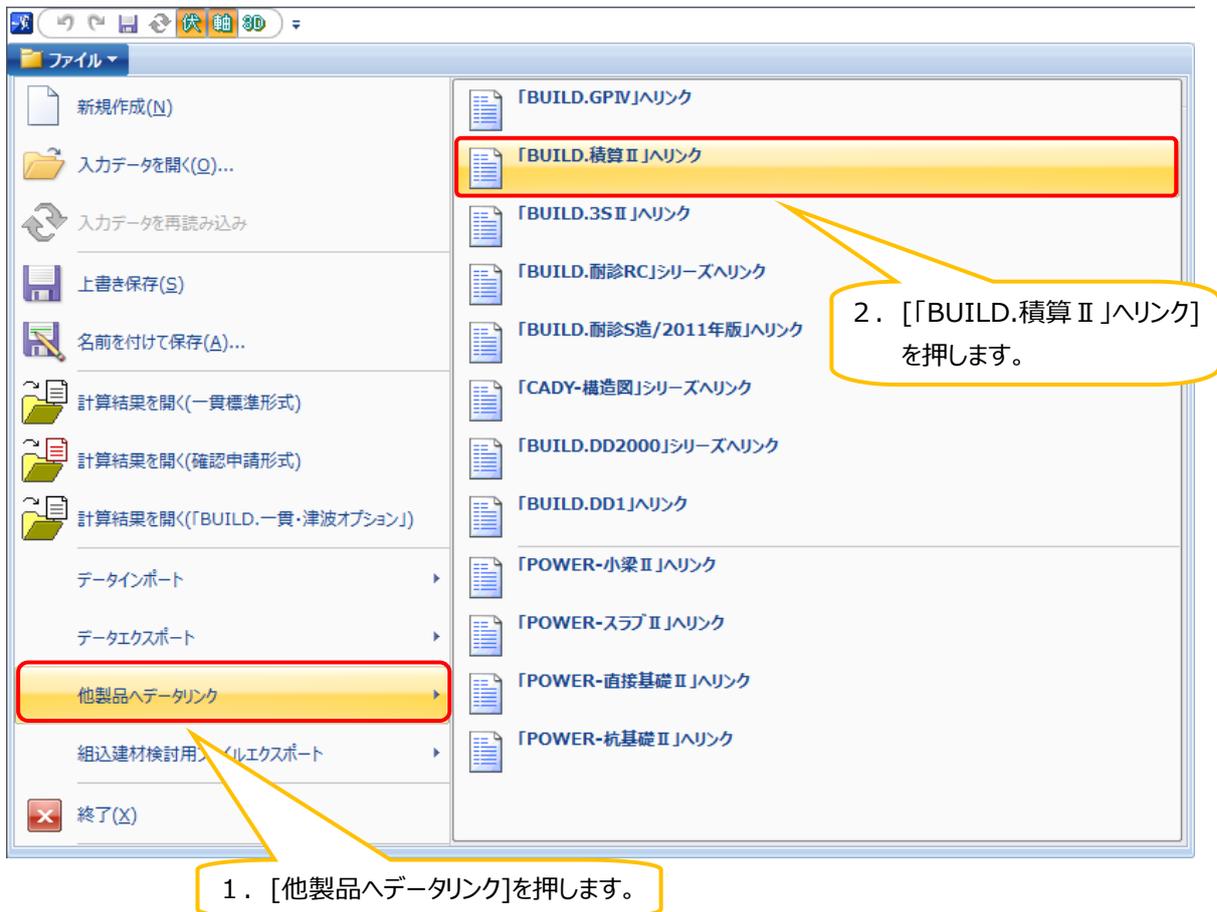
### ・株式会社向山工場製の「エムケーフープ 685」に対応

「BUILD.一貫Ⅵ」に合わせて、2025年9月にリリースした「BUILD.積算Ⅱ」(Ver.1.20)より、株式会社向山工場製の高強度せん断補強筋「エムケーフープ 685」に対応しました。

### ・「BUILD.積算Ⅱ」へのデータリンクの方法

「BUILD.一貫Ⅵ」で計算を実行した後、以下の手順に従って「BUILD.積算Ⅱ」へデータのリンクが行えます。

1. リボンメニューの[ファイル]メニューの[他製品ヘデータリンク]を押します。
2. [「BUILD.積算Ⅱ」ヘリンク]を押します。
3. 以降のデータリンクの操作および「BUILD.積算Ⅱ」についての説明は、[「今月のイチオシ」2023年5月号](#)で紹介していますので併せてご覧ください。



## ◆「BUILD.一貫VI」Q&A (適判等からの指摘事例)

### タイトル：逆せん断が発生している場合はプログラムの適用範囲外ではないかと指摘された

Q. RC造で耐震壁が偏在しており、柱に逆せん断が生じている物件について、確認検査機関より、一貫構造計算プログラムの計算式は逆せん断を想定したものではないため、逆せん断が発生した場合はプログラムの適用範囲外ではないかとの指摘を受けました。

どのように対処すればよいでしょうか？

A. 「BUILD.一貫VI」の応力解析方法には、三次元マトリックス変位法が採用されています。この解析方法は建物全体の変形状態を考慮しており、解析モデルによっては逆せん断が生じる場合もありますが、算出される応力は精算されたものであり、逆せん断が生じたとしても応力解析としては問題なく、プログラムの適用範囲内となります。

また、断面計算は、実際に生じた応力に対して検討を行うべきものであるため、逆せん断が生じた場合でも、その応力に対して断面検定を行えば問題はなく、こちらもプログラムの適用範囲内となります。

重要なのは、逆せん断が発生するか否かではなく、発生した逆せん断に対して適切な検討が行われているかどうかです。この点について、検査員が誤解されている可能性があるため、上記の内容を丁寧に説明してください。

それでもなお指摘が継続する場合は、どの計算式が逆せん断を想定していないと考えられているのか、具体的にご指摘いただくよう依頼してください。

※ [弊社ホームページのQ&A](#)では、この他にも、適判等からの指摘事例のQ&Aを390件以上、通常のQ&Aを4050件以上掲載していますので、ご活用ください。なお、Q&Aの閲覧は、[トータルメンテナンス](#)を契約中のお客様限定となります。